

## 幸せで納得のいく老後を そのための選択肢を広げて

第10回市男女共同参画フォーラムから



齋藤昭彦氏による基調講演

第10回市男女共同参画フォーラムが11月20日、荒屋コミュニティセンターで開催されました。

フォーラムは、市男女共同参画ネットワークが主催。市民や関係者ら約30人が出席し、男女ともに協力し合い、元気に暮らせるまちづくりの実現に向けて理解を深めました。

フォーラムでは、県立大学社会福祉学部の齋藤昭彦准教授が「地域とともに支え合い暮らし続けるために」と題して基調講演。市内の高齢者人口や要支援・要介護認定者数などの数字を示しながら、高齢者福祉・

介護施策の動向や地域包括ケアシステムについて解説。他自治体の高齢者福祉における取り組み状況も紹介しながら、地域の自主性に基つき、特性に応じて活動を展開していくことが必要と訴えかけました。

講演後は「わたしたちの将来へのアプローチ」について語り考え、早めに取り組むべきと題したパネルディスカッションを実施。進行役を県立大総合政策学部長の吉野英岐氏が、齋藤准教授と市内で高齢者福祉施設などを運営する3人がパネリストを務め、田村正彦市長も交えて討論が行われました。

## 誰にでも起こり得る認知症 ともに楽しく暮らすために

平成28年度第2回市認知症研修会を開催



自身が運営するサービス付き高齢者向け住宅の入居者を紹介する下河原氏



認知症の人が見ている世界をVRを用いて疑似体験する参加者

28年度第2回市認知症研修会が11月4日、西根地区市民センターで開催されました。

当日は、市民や市内高齢者福祉関係者ら約150人が参加。住宅などの設計施工や関東圏で高齢者専用住宅の管理・運営を展開する(株)シルバードの代表取締役である下河原忠道氏が講師を務め、住まいから認知症ケアについて考える講演が行われました。

下河原氏は、自身が手掛けるサービス付き高齢者向け住宅の運営を通して、認知症の人たちと向き合った経験をもとに講演。これまで認知症の人たちが施設入

所などし、人の管理の中で生活していることに違和感を感じていたことを話し「認知症は誰にでも起こり得るもの、特別なことではない。だからこそ、人として暮らしを楽しみ、安心かつ充実した生活ができるよう生きていく環境の整備をきちんと考えることが重要」と、訴えかけました。

また、認知症の人が見ている世界を疑似体験できるVR(バーチャルリアリティ)機器の紹介を行い「認知症の人の気持ちが分かる」と自分の行動が変わり、本人の行動も変えることができる」と、参加者に理解を求めました。

元気な時から自分のライフプランを考えましょう(社会福祉法人安代会りんどう苑事務局長 畠山勇司氏)

高齢者をもっと元気にするためにはバリアを乗り越える力を身に付けてほしいから、住宅施設の仕組みは「バリアフリー」です(オークフィールド八幡平 フィールドマネジャー 山下直基氏)

困ったら誰かに頼めるような関係作りと家族間で情報共有を図りましょう(社会福祉法人みちのく協会 富士見荘 松尾健司氏)

老後困る前に地域資源を探り、情報を集め、いろんな選択肢を知っておくことが重要です(県立大学社会福祉学部齋藤昭彦准教授)

人の世話になりたくないと思う人がたくさんいると思いますが、人の世話になる選択肢をたくさんもっている人ほど、幸せなのかもしれません(県立大学総合政策学部長 吉野英岐氏)

なぜ認知症の人がやることなすこと制限するような先入観をもって接する人がいるのだろうか

長生きよりも今が楽しいと思えるコミュニケーションが重要

人それぞれに役割があれば、目の前に仕事があれば、人は頑張る。誰かのために役に立ちたいという思いを踏みにじってはいけない。自分が人から必要とされる、感謝される体験を味わうと人は生き生きする。認知症の人だって同じこと。

認知症の人は感情がとても敏感だから生きていく周辺環境の整備がかなり大事

これからの高齢者・認知症の人の暮らす環境は「危機管理重視」から「生きがいを持つなど楽しむこと」に重点を置いて

認知症の人の気持ちになろうとする

↓  
自分の行動が変わる

↓  
認知症の人の行動が変わる



下河原 忠道氏

求められる住まいは、多数の同じような境遇にある人たちが社会から遮断されて形式的に管理された日常生活を送る場所ではないと思います。「管理」は依存を生みます。楽しく暮らすためには「管理」は不要です。

大都市であろうと小さな地域であろうと、まず取り組んでみることに!

パネルディスカッションで意見を交わす参加者

